



一六世紀・一七世紀イングランドの蒐集文化 : ジョン・トラデスカント（父）

著者	[吉] 原 ゆかり
雑誌名	文藝言語研究. 文藝篇
巻	44
ページ	135-154(73)
発行年	2003-10-30
その他のタイトル	“ Culture of Collecting in 16-17th Century England ”
URL	http://hdl.handle.net/2241/9861

一六世紀・一七世紀イングランドの蒐集文化

— ジョン・トラデスカント（父） —

1 木の実のなかの世界

「ホメロスの『イリアッド』全文を一粒の木の実に閉じ込めるごとく、あまたの驚異を一つの小部屋に閉じ込めることを願った」。一七世紀初頭イングランド王党派庭園技師にして珍キユリオステイ品蒐集家、トラデスカント父子の墓碑銘である。

トラデスカント父子（父ジョン・トラデスカント一五七〇？—一六三八、息子ジョン・トラデスカント一六〇八—一六六二）は、イングランドのチャールズ一世代から内乱・革命期をはさんで王政復古という動乱の時代に庭師として活躍し、イングランド、大陸、ロシア、アルジェ、新大陸を広く旅行、植物のみならず、さまざまな物品を蒐集し、それをテムズ河南岸ランベスで公開した（一六二九）。その「驚異の部屋」を、ひとは「方舟シヤーク」と呼んだ。

トラデスカント父子の蒐めた珍物をいくつかみてみよう。ユニコーンの角。六ないし十二層の入れ子になった象牙の小箱。象をもうち負かすといわれるロック鳥のかぎつめ。先住アメリカ人の手になる蛇の歯でつくった首飾り。モーリシャスの大きすぎて飛べないドードー鳥。ワイト島に降った血の雨。「ヴァージニア王パウハタン」

吉原 ゆかり

のマント。神話的な存在と、人の技巧の限りを尽くした工芸品、エスノグラフィーの標本と天変地異とが共存する、不可思議な空間である。

このような「方舟」を産出した時代とはどういう時代であつただろうか。トラデスカント父子は、チャールズ一世(一六〇〇—一四九)とその妃ヘンリエッタ・マライア(一六〇九—一六九)、初代ソールズベリー伯爵ロバート・セシル(一五六三?—一六二二)、初代バッキンガム公爵ジョージ・ウィラーズ(一五九二—一六二八)、アランデル伯爵トーマス・ハワード(一五八五?—一六四六)など、権勢を極めた王侯貴族たちの庇護をうけ、その庭師および珍品蒐集エージェントとして活躍した。トラデスカントを「地の果て」まで派遣して珍品を蒐集させていた王侯貴族たちは一方で、国家の威信を賭けてアートの名品を蒐集し、ヴァン・ダイク、ルーベンス、オラツィオ・ジェンティレスキなどの巨匠たちを宮廷に招き寄せ、ロンドンをヨーロッパのアートの中心地にしていた。トラデスカント父子が庭師にして先端技術者であつたように、彼らのまわりにはさまざまな技術^ア巧みの技をもった人物たちが娚集^ニしていた。絶対王政の「支配の具」たる遠近法を駆使して、スチュアート王朝を豪勢極まる神々の座に押し上げた宮廷仮面劇の魔術^ニ技術師イニゴ・ジョーンズ(一五七三—一六五二)、フランス出身の庭園技術者で、グリニッジ宮殿など数々の洞窟庭園を設計したサロマン・ドゥ・コー(一五七六—一六二六)やその弟イサック・ドゥ・コーといった、超絶的な技術をもつ建築家・庭園技術者である。

しかしロンドンに蒐集された美術品や珍品、豪勢を極めた館や庭園、そこで駆使された高度の技術は、国際的・国内的陰謀^{イントリグ}さかまく時代のなか、たちまちのうちに散逸し掠奪され、廃墟となる運命にある。イサック・ドゥ・コーの洞窟自動人形劇場は内乱期の混乱で失われた。バッキンガム公爵は暗殺されそのコレクションは散逸する。チャールズ一世のアート・コレクションの名品ルーベンスの祭壇画はテムズ河に投げ込まれ、残りのコレクションはチャールズが断頭台に登った四ヶ月後に競売にふされる。ルネッサンス絵画の精髓を集めたアランデル公爵の屋敷を暴徒が襲い、公爵は亡命中大陸で生涯を終える。トラデスカントのジ・アークは、王党派隠秘哲学者イライアス・アシュモール(一六一七—一九二)の手管をつくした陰謀で、合法的に掠奪される。本稿は、王室御用

達庭師にして稀代のコレクター、ジョン・トラデスカント（父）と彼が生きた蒐集と散逸の時代の研究である。

2 トラデスカントの方舟

トラデスカント父子は見慣れぬ、不思議な、異國的なものへのあくなき探求心に突き動かされていた。彼らの好奇心は、植物の道を極めようとする求道心にとどまることなく、植物以外のすべての稀少な事物にも広がっていた。

イングランドの庭園学にトラデスカント父子のなした業績は大きい。ムラサキツユクサ属の各種草本やライラック、パイナップルやバナナにアカシア、アルジェのアブリコットやトラデスカントの名前を冠したサクランボなど、彼らの手によってイングランドに導入された植物は数多い。数々の珍種植物を集めたトラデスカントの庭園はイングランド初の（実用的な菜園や果樹園と區別して）植物園とされ、彼らはイングランド博物誌の創始者と呼ばれている。

父ジョン・トラデスカントは、一六一〇年にロバート・セシルのハー（ト）フォードシア州ハットフィールド・ハウスの庭師に雇用された。それ以前の経歴については記録に残っていない。セシルは、『随筆集』で「庭について」（二六二五）を著述したヴェルラム男爵、セント・オールバンズ子爵フランシス・ペーコン（一五六一—一六二六）の助言を受けつつ、ハットフィールド・ハウス改築に当たっていた。噴水の設計はサロマン・ドウ・コーが担当し、南口正面と時計塔に設計はイニゴ・ジョーンズが担当している。父トラデスカントは同年から翌年にかけて、「チューリップ・バブル」直前のネーデルラントやフランスを訪れ、セシルのためにさまざまな植物を購入している。

一六一五年、初代ウォットン男爵エドワード（一五四八—一六二六）外交家、詩人のヘンリー・ウォットンの異母兄）のアウグステイヌス修道院跡の館（カンタベリー大聖堂そば）に招かれ、造園にあたる。アウグステイ

ヌス修道院は宗教改革による修道院解散以降、イングランド君主の所有物になっていた。そこから大貴族の所有に移る。ウォットン男爵直前の所有主がトラデスカントの前雇用主セシルである。セシルはストランドのショッピング街^{アリサス・ハウス}英国の財布／聖布囊の建築材とするため、旧アウグステイヌス修道院の石材を切り出して持ち去ったのだ。

つぎに一六一八年父トラデスカントは、ジェイムズ一世に北米大陸北岸に沿って大西洋と太平洋を結ぶ北西航路を開拓すべしという命を負わされたサー・ダッドリー・ディグズ(一五八三—一六三九)に同行、ロシアに向かいそこで植物標本採集を行う。ポーランドの攻撃を受けていたロシア皇帝の救援要請を受けての航海であったが、サー・ディグズ(東インド会社の株主でもあった)は流水に阻まれてモスクワ入りを果たせなかった。トラデスカントはこの航海でもさまざまな植物を採集、珍品としてはロシア式の算盤(現存するものとしては最古のもの)などを蒐集している。この航海について父トラデスカントは詳細な日記を残しており、これがロシアの植物についての最古の記録となっている。

一六二〇年、父トラデスカントはイングランド商人の地中海での貿易活動を脅かしていたバーバリ海賊退治を命じられた海軍提督サー・ロバート・マンセル(一五七三—一六五六)に同行、地中海に向かう。当時、地中海ばかりか北海、さらに西インドの海域をオスマン・トルコ海賊船が荒らしまわり、イングランド人を捕らえてイスラム圏に白人奴隸として売り飛ばすことも珍しくなかった。この前後の時期、父トラデスカントはジョージ・サンズ(一五七八—一六四四)やキャプテン・ジョン・スミス(一五八〇—一六三二)、サー・サミュエル・アーゴール(一五七二頃—一六二六頃)など、ヨーロッパのみならず広くイスラム圏やアジアで冒険旅行を繰り返すヴァージニア植民地の創始者となる大旅行家たちの知遇を得て、さまざまな珍品を寄贈されている。父トラデスカント自身はアメリカを訪れたことはないが、アメリカ植民に出資していた。息子トラデスカントは三度にわたり植民地アメリカを訪れている。

一六二五年前後に父トラデスカントのパトロンとなるのがジェイムズ一世とチャールズ一世の寵臣、初代バツ

キンガム公爵である。トラデスカントは、バッキンガムが権勢にまかせて蒐集した芸術品を陳列したロンドン、エンバンクメントのヨーク・ハウス、ラトランドのバーリー・オン・ザ・ヒル、エセックス州チェルムズフォードのニュー・ホールなどで庭園技師として働き、公爵のためにネーデルラントを旅行、樹木を購入している。ヨーク・ハウスの天井画を担当したのは、カラヴァッジオ派のオラツィオ・ジェンティレスキだった。同時に父トラデスカントは、美術品にむけるのと同じほどの情熱を奇怪な人工物や自然の珍品に対して傾けたバッキンガム（イングランド初の剥製動物陳列館を創設した）の、珍品蒐集エージェントとしても活動した。

庭園を設計し、土木工事を行い、植物の生成に必要な水の流れを制御するためには高度の技術知識が必要である。庭園技師^{ランドスケープ・アーキテクト}として当時の最先端技術を身につけていたトラデスカントの技術力は、庭園以外の場面でも有用だった。一六二五年秋に彼はバッキンガムが指揮をとったラ・ロシエル攻防戦に、水力技師として参戦、塹壕掘りや城塞攻撃で活躍した。記録には「公爵の庭師にして巧妙なる技師^{エンジニア}ジョン・トラデスカント」とある。ラ・ロシエルはフランス宰相リシュリユーのカトリック統一計画を阻むフランス・プロテスタントの最期の守りだった。この街を救うべく、イングランド、プロテスタントの軍隊がさし向けられる。しかしラ・ロシエル奪還作戦はイングランド軍にとって悲惨な結果に終わる。バッキンガムに率いられてラ・ロシエルに進軍したイングランド兵七千八十三人のうち、二千九八九人だけしか生還しなかった。攻防戦の主要舞台であったレ鳥^(Isle of Rhé)はその後「嘆きの鳥」(the Tale of Rue)として知られることになる。

レ鳥救援が失敗に終わったのは、チャールズのアート狂いのためである。軍事資金としてバッキンガムの元に届けられるべき資金を、チャールズはマンチュア^{Manchu}のゴンザール家のコレクションを購入するために使い果たしてしまった。栄華栄光を究めたゴンザール家のコレクションであるが、末代の退嬰は避けられぬこと、王侯の栄華を標す高雅なアートのコレクションよりも、極めつけに美しい「こびと」女や世にも珍しく色彩豊かな鸚鵡の方に魅惑を感じる当時のゴンザール家当主は、それらを手に入れるために、歴代の祖先が苦勞して集めたアート・コレクションを競売に出してしまう。これが運の悪いことに、レ鳥攻略と、時期が一致してしまうのである。か

くしてチャールズ一世は、アートのために、プロテスタントの大義を放擲した。

この従軍経験のなかで父トラデスカントは、戦火の隙を縫って大陸側に上陸し、大陸でしか手に入らない植物のくさぐさを入手していた。持ち帰った珍品には、「約一インチの銅製書簡箱。レ鳥攻略で、そのなかに収められた一通の書簡とともに入手。ある女が飲み込んで、そのまま吐き出したものだという」というのがある。

一六二八年、バッキンガムはラ・ロシェル戦での処遇に不満を持ち、バッキンガムを当時の「専制」の元凶と見なしていた士官ジョン・フェルトン(一五九五?—一六一八)の凶刃に倒れる。父トラデスカントは、カトリックとプロテスタントの宗教的・政治的対立、王の寵臣の非業の死という、国際的・国内的な政治的荒波のなかで世界を放浪したのだった。

一六二九年、トラデスカントはテムズ川南岸ランベスに地所を取得、館をかまえ数々の珍奇な植物を集めた庭園を造園、これがブリテンのみならずヨーロッパ全体におよぶ園芸学の中心地のひとつとなる。トラデスカントが世界各地から集めた珍品エキゾチックを展示する珍物陳列館「方舟」シニアークがロンドンに漂着したのである。

3 方舟の理念

ひとはトラデスカントの珍物博物館を「方舟」シニアークと呼んだ。トラデスカントは当代のノアと見なされたのである。すべての種類の獣、すべての種類の這うもの、すべての翼あるもの、すべての肉なるものを、その種類にしたがって、それぞれひとつが必ずつ収めたノアの方舟は、全世界のあらゆる物象を、その種類にしたがって、ひとつ閉ざされたクローゼットに陳列したいという蒐集家の欲望の寓意に他なるまい。トラデスカントの墓碑銘の「ホメロスの『イリアッド』全文を一粒の木の実に閉じ込めるごとく」という比喻で表されているのもまた、同種の欲望だ。あまりにも広漠としあまりにも無秩序な全世界を、小さな小さな空間に密閉し、ある秩序を与えたいという蒐集家の欲望、いわば細書術マイクログラフ／顕微鏡的なものを志向する欲望。

トラデスカントが集めた珍品リストを眺めてみると、そのような細書術／顕微鏡的趣味をうかがわせる蒐集品が数多みつかると。たとえば、「片面に聖ジョージとドラゴン、別面に八十八人の皇帝の顔を彫り込んだサクランボの種」、「プラムの種、アプリコットの種、サクランボの種、桃の種にちまちまと彫り刻まれた人物像と物語」などである。初期近代イングランドの驚異の部屋研究の大家、アーサー・マクレガーが「トラデスカントの珍品」で、この類に属するトラデスカントの蒐集品のひとつを詳細に描写している。

アーモンドの種（?）。正面には長髪に聖職者の四角い法帽を被り、古風な長衣を着て庄底の靴をはいた髭面の男が、フランドルの風景を背景にして座っている。彼はヴィオールを膝のあいだにはさみ、弦を調整している。その姿を木々の小枝が囲んでいる。裏面に、獅子、熊、猿を背に乗せた象、猪、犬、ロバ、牡鹿、駱駝、馬、牡牛、鳥、山羊、ヤマネコ、一群の兎が刻まれている。その下部には梟、別の鳥と栗鼠。

大きさ 高さ25ミリ、幅22ミリ

25ミリ×22ミリという極小の木の実のなかに、これだけの雑多な事物が彫り込まれている。極小に極小を重ね、小さな物体にさらに小さな物体をこれでもかとばかりに詰め込む、ナノテク趣味とでもいえばよいのだろうか。こういった極小で「密封的」な空間への固着は、「新大陸」の「発見」にともない世界が密封性を失い、マクロコスモスは調和と秩序に満ちた閉鎖空間であるとする伝統的な宇宙観が「新科学」の猛攻の前に破綻し、かつては宇宙の中心だった地球が歪んだ楕円の淵を彷徨うちっぽけな辺境の惑星に格下げされ、大宇宙が秩序も調和もなく果てもなく拡散していくように思えた時代において、細微で巧緻な小宇宙に閉じこもろうとする、防衛的反映である。

こういったオブジェは自然と人工、生のもとの人の手になるものという区分を混乱させ、自明のものと思われる範疇概念を脱臼させてしまう。細書術／顕微鏡的でありかつ、世界をその小さな空間に密閉しようという欲望

にとりつかれているという意味で誇大妄想的でもある、このような事物は、いわば人工的／技術をつくした自然であり、逆説と奇想に満ちた存在なのである。さらに、このような技巧的な事物とは、使用価値からあえていえばなんの役にもたたない、技量や労働力を無駄に投与したがらなくてはならない。しかしもちろん、ここにこのようなオブジェがコレクターズ・アイテムたりえる理由がある。投与された技術と労働力と生産されたものの実用的な価値とのあいだにある、法外な乖離ゆえにこそ、このようなオブジェは蒐集家垂涎の珍品の地位を獲得し、有用性を旨とする通常の市場の原理とは位相を異にするコレクターたちの市場で稀少なものとして流通するのである。そのような驚異の事物は、それ自体が驚異のただけではなく、それを所有している人物までも驚異と賛嘆に値する人物の地位に祭り上げる。

トラデスカントの集めた奇品のなかで、ほかに細書術／顕微鏡的な趣味をうかがわせるものとしては、「一二〇の鼈甲の櫛を中に入れた二枚貝」「三〇〇の輪でできているが、長さは一インチしかない金銀製の蚤のようにちっばけな鎖」「紙のように薄い、入れ子式に重ねられた五二個の木製のコップ一組」「象牙をろくろで削って作った一粒の胡椒の実の中に収められたチェスの駒一式」「象牙をろくろで削って作った一粒の胡椒の実の中に収められたチェスの駒一式」などがある。フランドルの風景を刻み込んだ25ミリ×22ミリのアーモンドの実とは、いうまでもなく、トラデスカントの「ジ・アーク」そのものの寓意、その極小縮刷版である。

4 「ストレンジ」なものへの偏愛の暴走

トラデスカントは庭師であったから、本来その興味はそれまで知られていなかったという意味や、異国のものであるという意味でのストレンジな植物に向かっていたはずだ。だがそれが、植物であっても動物であっても人工のものであってもなんでもよい、ただただ奇妙でさえあればなんでもという方向にねじまがっていき、偏奇なものへの偏愛が自己目的化していく。

このようすをうかがいしることができなのが、父トラデスカントが一六二五年に海軍秘書官エドワード・ニコラスに当てた手紙である。この手紙で父トラデスカントは、「珍奇もしくは知られていない奇妙な野禽と鳥の皮膚、嘴、脚、羽毛」「あらゆる種類の奇妙な魚」「奇妙な形の光る石ならなんでも」の入手を依頼している。この手紙でトラデスカントは衣装、武器、象牙製のフルートも依頼しているから、ここで働いているのは、人工のもの、動物、鳥、鉱物というような分類ではない。人工のものであっても天然のものであっても、等しく「ストレンジ」であるというカテゴリーに包摂され、人工か天然かという分類はそなかで瓦解してしまうのだ。ストレンジなものをすべてを、世界のあらゆるところから集めたいという、トラデスカントの「ストレンジ・マニア」精神がきわめつきの形で表れているのが、入手依頼の長大なリストの締めくくりである。「ストレンジなものあればなんでも」。

自然物は、類例が少ない、形状が変わっている（とてつもなく大きい、極端に小さい、グロテスクだ）あるいはエキゾティックであれば「ワンダー」である。人の手になるものは、手のこんだもので珍奇なもの、先住アメリカ人の羽毛細工のように自然のものを変わったやりかたで細工したものであれば「マーヴェラス」だ。ありとあらゆる珍しいもの、新奇なもの、驚くべきもの、他を圧倒しているものを見て吃驚仰天魂消る思いをすること魅惑されていたのが、一七世紀前半の好奇心の文化である。それぞれのグッズが「ストレンジ」で驚倒的だということだけではない。まったく違うもの同士が、「キュリアス」という軸で結ばれ並列的に並べられ、そのあいだに奇想天外な「類推の鎖」が生じてしまう、ここに一七世紀蒐集文化の驚異の奇想がある。そこでは贗物をつかまされてペテンにかけられてしまうかもしれないことすらその場の陶酔の一部でありうる。トラデスカントの「ジ・アーク」はまさにそのような驚異の部屋であった。一六三八年に「ジ・アーク」を訪問したドイツからの旅行者の目を借りて、息子トラデスカントが編纂したカタログを片手に、トラデスカントの「ジ・アーク」を訪問してみよう。

中庭には鯨の肋骨一組〔中略〕驚異の部屋の内には火龍^{サラマンダー}、カメレオン、〔中略〕スコットランドの木に生えた鷲鳥、飛び栗鼠、魚に似た栗鼠、インドの目にも鮮やかな羽毛の鳥、石に変化したもの〔化石のこと〕、骨にこびりついた人肉〔中略〕貝殻、人魚の手、ミイラの手、生きているような蠟製の手、ありとあらゆる種類の宝石、コイン、羽毛で作られた絵画、キリストが磔にされた十字架のかけらひとつ、フランスのアンリ四世とルイ十三世のたまし絵^{パースペクティブ}この絵の真ん中に磨き上げた鋼鉄製鏡を置く自然な姿が浮かび上がる、小さな箱に収められた風景のパースペクティブだまし絵〔中略〕かぎつめの三つあるヘラジカの蹄、四十二ポンドの重さの人骨、インディアン^{インディアン}の弓、象の頭、虎の頭、西インドで処刑に用いられる毒矢——死刑を宣告された人間の背中をこれで切り開き、そのために犯罪者は死に至る——ユダヤ人が割礼に用いるナイフ〔中略〕ヴァージニア王のローブ〔中略〕プラムの種に精妙に刻まれたキリスト受難像〔中略〕西インドの水中で見つかった、キリスト、マリア、ヨセフの姿が刻まれた石、バックingham公からの美しい贈り物で、羽毛に黄金とダイヤモンドが付けられ四大元素を表しているもの〔中略〕蛇の骨でできた帽子バンド。

なんとも驚くべき蒐集庫ではないか。この訪問記から見えてとれるように、種目別の分類・整理を旨とする近代的美術館・博物館と、その先駆をなすものと呼ばれることもある初期近代の驚異の部屋の蒐集原理とのあいだには、程度の問題ではなく構成原理の問題として、超えがたい隔絶がある。初期近代の珍奇博物館では、極大のものと極小のもの、人の手になるものと自然が生みだしたもの、神話的なものと実在するもの、国内のものと異民族のエスノグラフィックな標本とが、同じく「ストレンジ」なものとして同列に並べられ、それらが「ジ・アーク」の「木の実」のように凝縮した空間に展示されていたのだ。

トラデスカント蒐集品のリストを見ると、おそらく「断片へのフェティッシュな執心」とでも呼んだらよいような傾向がうかがえる。たとえば、「ジ・アーク」カタログの、鳥類の項目は、卵、喙もしくは頭部、羽根、かぎつめなど、鳥の身体部分別のコレクションと、鳥の全身標本とがことさらに区別して分類してある。身体パー

ツ別に分類されているものを見ると、「不死鳥の尾の羽根二枚」とか「象をつかみとるというロック鳥のかぎつめ」などがある。しかし素朴に考えて、どうやれば「羽根二枚」が「不死鳥の尾」であると判るといふのだろう。似たような例としては、「天然物ドラゴン、ニインチ強」というのがある。天然物ドラゴン？ということはつまり「人工」のドラゴンもいたということか。ニインチ強（約六センチ）というのも妙に小さい。実際には蜥蜴のことだろう。

ヴァーチュオーソたちの、たとえばバジリスクのかぎつめは雄鶏の形をしている、という古典古代以来の伝統を知悉した教養がかえって邪魔をして、口八丁手八丁の香具師の騙りに愚弄されることもままあったようだ。初期近代イタリアの、香具師がスペクタクルを繰り広げるフェアート、ヴァーチュオーソたちの驚異の部屋、そしてマーケット資本の論理との親近性をみごとに解剖したポーラ・フィンドレンによれば、「バジリスクの作り方」――（魚の）エイを背開きにして、そこに雄鶏の首をつける――という指南書まであったのだそうだ。

ヴァーチュオーソら自身が考えているほどには、カネの論理とコレクシヨンの論理は隔絶したものではなく、むしろ初期近代におけるマーケット・エコノミーの論理に下支えされているのが蒐集文化だといえる。フィンドレンも述べている通り、展示室に並べられる標本は、コレクターのキュリオシティになる以前においてたとえば薬草などのような形で活用されていた商品だったのであり、ヴァーチュオーソ以上に実地検分に長けた漁師や薬種商人たちにしてみれば、コレクターたちとは商品の特殊な購買層に過ぎず、キュリオシティとは特集な売れ方をする商品に他ならない。蒐集は暇とカネを持て余した貴紳にあさわしい趣味という位置づけをされていたのだから、大枚をはたいて珍品を購入する行為はすなわち衛示的消費という商業活動なのだ。コレクシヨンとグロバルな経済市場の形成とはパラレルな関係にある。本来の使用価値と、蒐集品として新しく獲得された意味作用との微妙に重なりつつ背反するロジックとが、偽バジリスクの市場を生む。使用価値からいえば屑に過ぎないものが、コレクターの宝となる。市場の鍊金術。自然が驚異を生み出さないとしても、市場はそれを捏造することができるのだ。

「ストレンジ」なもののへの偏愛は「ストレンジ」な土地、異国の土地への憧憬でもある。「ヴァージニア王のロープ」が「ジ・アーク」に収蔵されるまでには、次のような冒険と他者収奪のものがたりがある。トラデスカントの知人に大冒険家、キャプテン・ジョン・スミスがいる。ネーデルラントやハンガリーで兵士生活をおくったあけく、タタール地方で奴隷となるが、主人を殺害して逃亡、ヨーロッパを経由してイングランドに帰る。一六〇六年さらなる冒険を求めてアメリカに渡り、そこで先住民の首長パウハタンに囚われ、あわや頭を砕かれそうになったところの危機一髪を、パウハタンの娘ポカホントスに救われる。スミスは嫌がるパウハタンを無理にキリスト教式の儀式で王として戴冠させ、祝賀として衣服や家具を贈り、返礼としてパウハタンのモカシン靴とマントを贈られているが、これがトラデスカントの方舟の珍品のひとつとして展示されることになる。「ヴァージニア王パウハタンの、貝殻で飾り縫いされた衣服」である(スミスは蔵書の一部を父トラデスカントに遺贈している)。ポカホントスはスミスの配下だったジョン・ロルフの妻となりレベッカの名で洗礼を受け、珍品「原住民のプリンセス」としてロンドンで展示されることになる。「ジ・アーク」カタログに記載されている「弓矢をもったインディアン¹の絵とカヌー²」とは、まず間違いないく、サー・マーティン・フロビッシャー(一五三五ころ—九四)が一五七六年北西海路を求めた旅からイングランドへ連れ帰って見せ物にし、カヌーの漕ぎ方を実演させたイヌイット(エスキモー)とそのカヌーを描いた絵のことを指している。トラデスカントの「ジ・アーク」はアンソニー・シェルトンのことばを借りれば、「³侵⁴略⁵のキャビネット」という一面を持っていた⁶。

4 トラデスカントの驚異庭園ツアー(ヴァーチュアル)

トラデスカント父子が造園した庭園とはどういったものであっただろうか。父子が造園した庭園で彼らが造園したままの形で現存しているものはない。父トラデスカントがウォットン卿のためにカンタベリーのアウグステイヌス修道院跡の屋敷に造園した庭園を一六三五年に訪れた人物が、その印象を書き残している。ここからト

ラデスカントが造園にかかわった庭園の雰囲気はいくぶんかを味わうことができるだろう。筆者はかつては修道院として栄えた館が、なかば崩れ落ちた廃墟の美を呈しているさまを憂いをこめて述べたあと、この庭園について次のように語っている。

長い散歩道を歩いていくとやがて樹木でできた錯綜した迷路にいたる。〔中略〕膝までの深さで四スクエアほどの、濁らない浄水の巧緻をつくして造られた泉がある。その泉のまんなかには小さな緑の島があり、カローンがボートを漕いでいる。土手には水を吹き出す蛇、^{スネ}、^{スネ}、奇妙なさかなの彫像があり、渡し守とその番犬に水をはきかけている。水は栓の調節で噴水に運ばれるのである。

この描写や、ハットフィールド・ハウスの図案から見る限り、トラデスカントが造園に関係した庭園は、樹木の迷宮や、常緑の低木を使って四角い枠のなかに飾り結び模様を浮かび出させる飾り結び花壇、生きた木を形よく刈り込んで幾何学的な形に仕立て上げる装飾刈り込みを多用した庭園であったようだ。当時の庭園は論理的な庭園であった。論理的というのは、庭の形が四角で、そこにある花壇も通路も、池も装飾刈り込みも、すべてが左右対称、幾何学的な形に出来上がっていたということである。庭は完璧なまでに統率された自然であり、建物（宮殿）がそのすべての中心にくるように意図されていた。明確な中心を持つこのような超人間的な整形形式庭園は、イニゴ・ジョーンズが導入したプロセニアム・アーチ、宮廷仮面劇の遠近法舞台とならんで、すべての権力を君主に集中させる絶対王権の装置であった。

上に引用した描写によると、トラデスカントが造園にかかわった庭園では、鬼面人を驚かす類の驚異の水力自動人形が多用されていたようだ。番犬ケルベロス（頭が三つで尾が蛇）を引き連れた三途の川の渡し守カローンの水力自動人形がボートを漕ぎ、噴水ではエキゾティックなスコピオン、ストレンジなさかな、おそらくドラゴンを指すと思われる蛇などの、奇怪で巧緻をつくした水力自動人形が口から水をはく。トラデスカントの庭園

は、ジョン・イーヴリンがサン・ジェルマンの庭園で目にした、水力で動いて音楽をかき鳴らし野獸を飼ひ馴らすオルフェウスの自動人形の地下小洞窟^{グロト}や、サロマン・ドウ・コーがデザインした、水力の働きでメルクリウスが笛を吹き、天使が飛び交い、彫像が喋る驚異庭園に似ていたことだろう。このような水力仕掛けの驚異の庭園は、クテシビオス、ピザンティウムのフィロン、アレクサンドリアのヘロンなど、アレクサンドリア学派の水力機械学がルネッサンスに再発見されたことから大流行をみたものである。前期スチュアート朝絶対王政の視覚政治においては、見る者にワンダーの念を抱かせることが、すなわち見る者を支配することである。見る者を超絶技巧で恍惚境に誘い、しかも自らの側はそれがいして騒ぎ立てるほどのことまでもないものであるかのごとく「さりげなく」ワンダーを着こなすことが、視覚的スペクタクルを通じた支配の法則だ。宮廷仮面劇がそうであったのと同じく、当時の庭園もまた、そのようなワンダーを通じた支配のための超絶技巧であった。

先述したとおり、トラデスカント父子が造園した庭園はそのままの形では現存していない。ここでは彼らとゆるやかにつながっていたふたりの庭師が造園したワンダー・ガーデンを見ることで、トラデスカント父子の庭園を忍ぶよすがとしよう。

父トラデスカントの後をついでオックスフォード薬草園の主任になったヤコブ・ボバルトはドイツ出身、奇行で知られ、友としたのは山羊である。一六四八年ころまでには一六〇〇を超える植物標本コレクションを蒐集していたが、そのうちのひとつイチイの樹は、巨人の形に装飾刈り込みしてあったという。内乱・共和政期のオックスフォードは王党派の砦だった。この樹木性の巨人はこの街を共和政勢力から防護する魔法の巨人だったのだ。巨大さのスペクタクルという点では、たとえばサロマン・ドウ・コーがデザインしたリッチモンド宮殿の「プラトリノ」のそれより三倍大きい巨人。内部に種々の部屋、頭部に鳩舎、基部に洞窟^{カバ}などに通じるものがある。

ジョージ・ブッシエルはフランス・ペーコンの使用人だった。主人の没落後漁師や隠者の生活を送りつつ、主人の残した「洪水以前の父祖たちに劣らぬほどの長命を保つ秘訣」を研究する。彼はトラデスカントの「ジ・アーク」カタログに、珍品の寄贈者のひとりとして名前を挙げられている。ブッシエルは一六二八年—一六三五

年にエンストン・マールヴェルズを造園する。その庭は、入り口に水のカーテン、空中に銀の玉を吹き上げる七フィートの噴水、魔術で動くように見える獣や鳥というように、当時の驚異庭園の典型であったようだ。サロマン・ドウ・コーが開発した水力動力技術を活用したこの魔法の洞窟には、チャールズ一世とヘンリエッタ・マリアも訪れている。

絵画、幾何学、数学、数秘哲学に基づいた設計や造園理論に通暁し、水力技術者であり建築家でありグロッタや自動人形の設計者である、これら巧妙なる技師たち。有用さという至上命令を嘲笑うがごとく、ひたすら瞳目させときに恐怖させるための巧緻な機械仕掛け、高度の技術を要求する精巧無比なガジェット（イアン・ジャクソン・マクスウェル）の制作者である彼らには、技術一本槍のテクノロジの使徒でもなければ、かといって天上の美を追求する芸術家というわけでもない、どこか外道なうさんくささと、それゆえの魅惑がある。早くも一六三八年には、ブッシュェルが「ヘルメス（ヘルメス）と新機軸開発に取り憑かれた技術屋、がらくた狂い」と揶揄されることになるように、このような巧緻な庭園は早晩、時代遅れの屑、迷信と迷妄にとりつかれた暗愚の園とされることになる。

トラデスカント父子の教会であったランベスの聖メアリー教会は、現在庭園史博物館として公開され、そこには父トラデスカントの失われてしまったハットフィールド・ハウスの庭園が再現されている。装飾刈り込みを用いた飾り結び花壇で、そのかたわらにはトラデスカント一族の墓がある。庭園史博物館（Museum of Garden History）のホームページ <http://www.museumgardenhistory.org/> を訪れてみれば、わたしたちはトラデスカントの庭園のなかを自ら歩いているかのごとく、パノラマ式に眺めるといふヴァーチュアル散歩経験をもつことができるだろう（二〇〇三年、六月十五日確認）。

5 ジョン・イーヴリンとともに、ノアの方舟でお買い物

どこにでも顔を出すジョン・イーヴリンは、内乱・共和政期中、当時の政治体制に対する暗晦まじりの異議申

し立てのひとつの姿勢の取り方として、その時期のほとんどを大陸での物見遊山に費やしたわけだが、オールティックが彼のことを『ロンドンの見世物』で「一七世紀型ヴァーチューオーソの典型と呼んでいる」とおり、好奇心の塊である。トラデスカントの「ジ・アーク」も数度に渡って訪問している。

イーヴリンは、サン・ジャルマンの庭園を訪ねては地下小洞窟の、水力で動いて音楽をかき鳴らし野獣を飼い馴らすオルフェウスの自動人形劇場に感嘆してみたり、ルーエンでは西インド産の珊瑚や鼈甲で作られた精妙な装身具を買ひ漁ったり、フィレンツェでは非常に手の込んだ時計細工とか皇帝の頭像を刻んだ卵ほどに大きいトルコ石に眼を瞪つてみたり、椅子の肘掛けに仕組まれたバネ細工で肘掛けから鋼鉄の拘束具が飛び出して座った人を固定してしまう拷問具に背筋を寒くしてみたり、システイーナ礼拝堂の図書館を訪問しては、バラティン(ファルツ)図書館から略奪されローマに集められた稀少本の運命を嘆いてみたり、ヴェスピアス火山で犬を使って残酷きわまる硫黄の毒性に関する実験を行つたりしている。イーヴリンがパリの「ノアの方舟」と呼ばれるショップを訪ねたときの日記を引用しておこう。

橋の方に面した通りには、香具師、機械技師、人形使いが住んでいる。「中略」こちら側には「ノアの方舟」と呼ばれる商店があり、そこでは自然物であれ人の手にかかるものであれ、インドのものであれヨーロッパのものであれ、贅沢品であれ実用品であれ、ありとあらゆる珍品奇物を金を出せば買うことができる。キヤビネット、貝殻、象牙、乾燥させた魚、珍しい昆虫、鳥、絵画などなど、何千もの奇妙奇天烈異国風のものが売られている。

香具師、機械技師、異国風の珍物が、イーヴリンの識覚領域という同じ平面に並ぶ。フェアと先端技術と稀少な標本がお隣同士に配置されているといつてもよい。

聖書ノアの方舟は、世界のあらゆる事物を閉ざされた空間に蒐集したいというヴァーチューオーソたちの夢の原

型である。また初期近代のコレクションで広く行われた、蒐集された事物の一覧カタログ出版販売という行為の究極の祖型、いわばウル・カタログであろう。イーヴリンが記録している「ノアの方舟」が博物館ではなく、エキゾティックな商品を陳列した商店であったことに表れている通り、蒐集しカタログ化し展示する行為は、ショッピングの誘惑に限りなく近い。トラデスカント父子がそうしたように、ヴァーチュオーソたちが蒐集した珍品をカタログとして出版することは、それだけの壮麗な珍物を蒐集した自己の女人好みの鑑賞眼を顕示し世に知らしめる「自己展示」の営為であったのと同時に、カタログ閲覧を通してコレクションの交換・売買を可能にするための営為であった。ある種のカタログ・ショッピングの原型であるということだ。トラデスカント父子の「方舟」カタログに、珍品の蒐集に手を貸してくれた人々の一覧が掲載され、多くの驚異博物館において訪問者が署名を求められたように、コレクションに関係しそれを訪問した人々の名前までもが、コレクションの対象になる。トラデスカント父子の「方舟」カタログに記載された寄附者カタログは、まさに当時の名士目録とも呼ぶべきものとなっているのだ。

6 成り上がり者のキャビネット

トラデスカント父子の「ジ・アーク」は、一五世紀以来の驚異の部屋の系譜に属しているが、独自の特徴として、それが王侯貴族の持ち物ではなく、中層の身分の者が蒐集したものであること、選ばれた少数の者だけが訪れることのできる閉ざされた空間ではなく、料金を払えば誰でも入場可能な「公共」の場であったことが挙げられる。このふたつの特徴は、トラデスカント父子の「ジ・アーク」を、前の時代から続く伝統というよりも、後の時代に展開していく資本化された公共性へとつないでいく要素である。ここでトラデスカントの蒐集が、政治的動乱の時代の身分秩序に対してもついていた意義を確認しておこう。

蒐集文化は貴族階級の危機から生まれた。成り上がり貴族が雨後の茸のように増殖し、富貴の身分であること

の意義にデフレーションが起きる。家紋を名乗ることのできるサーの称号は、国庫に打撃を与える他の褒賞、たとえば恩給やモノポリー権などが種切れの場合に、替わりに乱造される空手形となる。そうすると古い家系を持つ貴族の側としては、成り上がり者と自分を差異化しようとするわけだが、その手段のひとつが、それ自体としてはなんの役にも立たないミラビリアやアートを蒐集し、自らの家系の由緒正しさを保証してくれる家系図や紋章などの骨董趣味に熱中することだった。

アランデルに目をかけられ、彼の子息の教育に当たったヘンリー・ピーチャムの『紳士大全』は紳士たるものの嗜むべき諸芸を解説したマニュアル本で、たいへんなヒット作となり数世代にわたって紳士たらしとする者の必読書になっていく。ピーチャムは、紋章学の衰退をなげきつつ「昨晚の茸とともにむくむく生えてきたでしゃばりの成り上がり者」の増長により、紳士身分の意義が空洞化しつつある現況を嘆いている。ピーチャムが紳士必修の教養として挙げているものに、古物研究、美術研究、会話作法、宇宙誌、幾何学、詩、音楽、絵画、体操、魚釣り、紋章学、旅行がある。⁽¹⁰⁾

しかし珍品や骨董、アートに凝り、それ自体としては何の役にも立たない奇妙なものを蒐集することが貴紳の徴とされれば、それを逆手にとる戦略も当然生まれてくる。富貴の身分を気取りたければ、アートや珍品奇物に凝ればよいというわけである。トラデスカント父子など、出自の身分は決して尊くないコレクターたちは、この逆転の発想で社会的階層をのし上がっていったのだともいえる。トラデスカント一族は、方冊コレクションの入り口や、方冊カタログの表紙、一族の墓に麗々しく紋章を飾った。しかし厳密に言えば、彼らには紋章を使用する権利はなかった。ピーチャム式に言えば、彼らは紋章学を愚弄する「昨晚の茸とともにむくむく生えてきたでしゃばりの成り上がり者」に他ならなかったのだ。旧来の階級社会体制に基づく驚異と珍物好み（ワンダー・オブ・オブジェクト）の文化と、驚異の珍物すら商品化してしまう新しい体制の両方に同時に属しているトラデスカントは、過渡期のこのような逆説を生きた人物だった。

王侯貴族のコレクションは、しかるべき紹介状を持った選ばれた人物だけが入場を許される、閉ざされた空間

であった。しかし「方舟」には六シリングという料金を払えば誰でも入場できたのである。トラDESCANTの「方舟」は、ロンドン市民が休暇を楽しむ絶好のスポットとして大人気を呼び、数多くの外国人客もそこを訪れている。トラDESCANTのコレクションは、木の実のような極小空間への凝縮と自己充足性を志向すると同時に、一般に広く開かれ多くの人の驚愕の視線にさらされるという、矛盾を内包していたのである。

(1) トラDESCANT父子については、以下の文献を参照。R. D. Altick, *The Shows of London* (Harvard University Press, 1978) [R・D・オールティック「ロンドンの見世物」監訳：小池茂「国書刊行会」1989]；Mea Allan, *The Tradescants: Their Plants, Gardens and Museum, 1570-1662* (London: M. Joseph, 1964)；Arthur MacGregor (ed), *Tradescant's Rarities: Essays on the Foundation of the Ashmolean Museum* (Oxford: Clarendon Press, 1983)；Prudence Leith-Ross, *The John Tradescants: Gardeners to the Rose and Lily Queen* (London: Peter Owen, 1984)；Lisa Jardine, *Ingenious Pursuits: Building the Scientific Revolution* (New York: Doubleday, 1999)；Marjorie Swann, *Curiousities and Texts: The Cultures of Collection in Early Modern England* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2001)。

(2) 前期メチアムと神のトール・ロマン・モンジュについて、以下の文献を参照。Arthur MacGregor (ed), *The Late King's Goods: Collections, Possessions, and Patronage of Charles I in the light of the Commonwealth sale inventories* (Oxford: Oxford University Press, 1969)；Malcolm Smuts, *Court Culture and the Origins of a Royalist Tradition in Early Stuart England* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1987)；Jonathan Brown, *Kings and Connoisseurs: Collecting Art in Seventeenth-Century Europe* (Princeton: Princeton University Press, 1995)；メチアムと伯蔵について、以下の文献を参照。David Howarth, *Lord Arundel and His Circle* (New Haven and London: Yale University Press, 1985)。初期近代視覚文化の権力装置について、近年の以下の論文の論集が優れている。Peter Erickson and Clark Hulme, *Early Modern Visual Culture: Representation, Race and Empire in Renaissance England* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2000)；Barbara Maria Stafford and Frances Terpak, *Devices of Wonder: from the World in a Box to Images on a Screen* (Los Angeles: The Getty Research Institute, 2002)。

- (3) ヤーコブ・トントナーの『*Die Kunst der Kunst*』の文庫を参照。Compiled by Michael Hunter in conjunction with Kenneth Garlick and N. J. Mayhew, *Elis Ashmole 1617-1692: The Founder of the Ashmolean Museum and His World* (Oxford: Ashmolean Museum, 1983).
- (4) Susan Stewart, *On Longing: Narratives of the Miniature, the Gigantic, the Souvenir, the Collection* (Durham: Duke University Press, 1993), p. 152.
- (5) Paula Findlen, *Possessing Nature* (University of California Press, 1996); Paula Findlen "Inventing Nature: Commerce, Art and Science in the Early Modern Cabinet of Curiosities," Pamela H. Smith and Paula Findlen (eds), *Merchants and Marvels: Commerce, Science and Art in Early Modern Europe* (London and New York: Routledge, 2001).
- (6) Anthony Alan Shelton, "Cabinets of Transgression: Renaissance Collections and the Incorporation of the New World," in John Elsner and Roger Cardinal (eds.), *The Cultures of Collecting* (London: Reaktion Books, 1994) [ジョン・エスナー・ロジャー・カーディナル編『蒐集』高山宏・高島美子・坂口裕訳、研究社、一九九八年]。
- (7) フロの文庫を参照。中尾真理『英国式庭園——自然は直線を好まざる』講談社選書メチエ、一九九九年。Roy Strong, *The Renaissance Garden in England* (London: Thames and Hudson, 1979); John Dixon Hunt, *Garden and Grove: The Italian Renaissance Garden in the English Imagination, 1600-1750* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1986).
- (8) E. S. de Beer (ed.), *The Diary of John Evelyn* (Oxford: Clarendon Press, 1955)。フロの記載を参照。27 Feb. 1644; 19-24 Mar. 1644; 18 Jan. 1643, c.8 Feb., 1645。ヤーン・フロの『フロの日記』を参照。17 Sep. 1657; July 23, 1678.
- (9) 3 Feb., 1644.
- (10) Henry Peacham, *The Complete Gentleman, the Truth of Our Times, and the Art of Living in London*, edited by Virgil B. Heltzel (Cornell University Press, 1962), Ch. XV "Of Armory, or Blazon of Arms, with the Antiquity and Dignity of Heraldry," p. 131.

本論文は平成14年度・平成16年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究B（一四七一〇三三四）の成果である。